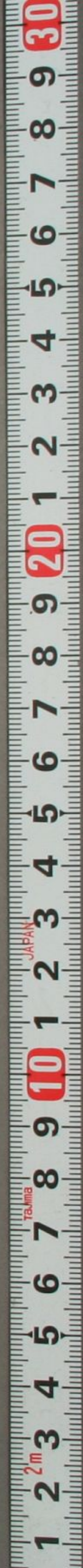




中村俊定文庫  
文庫 18  
387  
1





夏引集

上

桃鏡撰



を  
の  
つ  
か  
ら  
月  
の  
温  
解  
の  
為  
量  
也



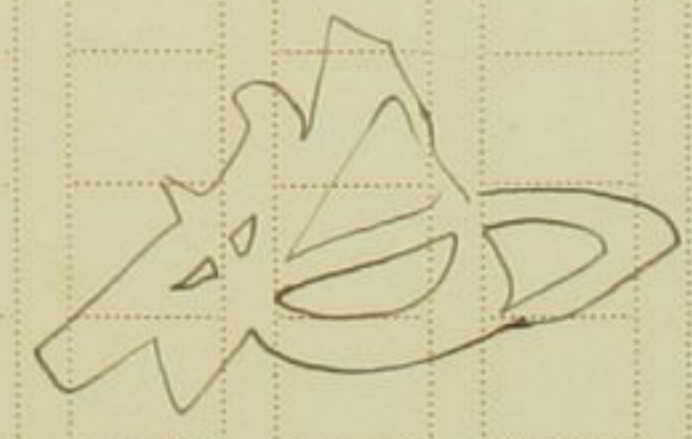
序

持て 初学の字引する書机にほれ文車にあ  
 まるといへとも 皆前句と当句のつなきしを  
 リのいにして三句のはこびを教るものすくな  
 し 爰に芭蕉庵の合羽にゆかりある京都の士水  
 上亭桃鏡子かの叟の細くかろひたる跡を―た  
 ひ左ま―世務のいとまあるあり―ハ俳林  
 に分入て新古の花実を拾ひ三句のわたり五十



餘篇に董其畝の見よからむかたの句解を  
 添特月雪の折にふれたる言捨高名の句くを  
 追加して板にちりはめ冊を呼て夏引集とす。  
 實にも言葉のあやにしきを百千萬に織なせる  
 しけ三句の一轉也なを桃子が説に委しけ小は  
 予は只一部の趣意を養て筆をさし置ぬ、流下  
 雲水大夢居士

寶曆十一年己春三月



MARUZEN



三句わたりの説

水上亭

桃鏡述

貞徳老人應安乃連歌式を御筆に和らけはしめ  
 二連俳二門に別々、其後難波の宗因檀林の新  
 凡を度すといへる。附合は連歌に吳有しす。

貞徳風

轉轡首とやき足が成らん



筆のねえにしめる恋あせに

実因風

夕月の赤い紙よて目を張れ

これほあの世の西風の責か

かく狂言を弄ひて二句の間に余意を疎す事更

になかりける爰に芭蕉の翁杜律の風骨を探り

山家集の寂をたとりて正風建門の比かこよ

枯枝に鳥のとまりけり秋の暮

鉄かたけ行 霧の遠里

かゝる迷艶の附方に人情の理屈をほとくとい

去あ 辰とて  
種をよま  
いそ明や沖の  
時をよま帆片帆  
あつては揚りあつ  
あつては揚りあつ  
いそ明や沖の  
時をよま帆片帆  
あつては揚りあつ  
あつては揚りあつ

へと北世上いまた古風のねはりに縛られて只

ひた附につけ侍れば其比席上の常談には俳諧

は只一句く復句集するやうに附はなしてを

のつから二句の同は蓮莖の切はなして糸を引

に似たりと教申すれとぞ。さハ飛鳥井殿の

鞠のちかき人には遠きこそよけれとしめし遠

き人には近きをよしとの玉ふかごとく明師の

其代其時をしれるといふ一し。忘かるを其角

流言をばしめ蕉門の古老や、死うせ此道の萃

湘へ正徳享保のころほひより都鄙一句の作に



わしりて

着板書は早乙女の腰

乳母に出し鏡持に出て瀧川の

氏活徳活列の俳一丸種よりなかれ流流て今やた

まく附合えこひのお穿整ある人ハねちいやく

の古風に落して此比專高貞の句作を見れば

立往生才植はかり流れけり

女衞の女房是せ物を産む

海士の志づんで志うぬ雷

長持をかついて嘯遠くなり

目を煩ふて客人て居る

されは長持の跡先にはなしの遠きも鏡熊牛の

沈みて才植はかりなかれたるもいはゆる自問

自答の理屈にしこ是を句論の句とハいふし

むかしもてほやせる一句の作といふは

親と妻を打登のつれ

餅作了櫛の廣葉をうち合せ

又

覗きよさうな木格子



宿札に役名付したるといふ小類

晋子の著作に 餅作りの附句は初懐紙の百頁  
魚行有ける時親と暮を打登のつれくは五月  
雨の外有へかす 只かしはもちといふ事を  
十七文字に言述よと翁の申されしに當句の積  
凡や、沉吟のさま久之けはかたはらよ倒  
の晋子かくは如何伺ひ侍るに梅の腐葉のうる  
ハ、き牛車かた翁をはしめあを庭中感した  
りとを。後の宿札の附句は醫師とし指南者とし  
次の附句に其人を譲てよく問小類といはしつめ

たりと芭蕉もうなつて申されしとかや。すれ  
は一句の作とても跡の附句の用なす事を忘る  
一し。今いふ自問自答の理屈ハ附句の余情を  
念し、一巻き、の言勝に落ちたり。只恐へ  
きハ句作と理屈との取捨なす事をわかれ芭蕉  
の存佛頂禪師の會下に系して投子一籠の茶に  
俳諧の三句目を悟て轉隨放逆の四道に自在を  
得ら小けり。されは附句は一句に一句附あふ  
せたりを牛柄といふへかす。歌仙は三十  
六句の長篇百頁は百葉の序破急也。さハ皆三



句のはちれより千化菊妻のはこいあはは年比  
 雪中庵の席に<sup>キ</sup>出したる新古五十余章予か不  
 才をもちいさ、か句解を添ふといへとも少し  
 き、<sup>意</sup>我名を用ひず師説の終に餘意を述べて遠近の  
 同門と志を同じうす是を他門に對さは潜行密  
 用といふし。

二條良基公不運抄  
 三義五部  
 三義

附合三義

一 寄合

前句に對して趣向を定むる事

一 句作

前句に對して新古虚实の事

一 てには

前句に對して志をりの事

同四道

一 轉

前句の人情其場其時の一轉已  
言わく二天とあり

一 隨

前句の姿情を了こがさす隨ふ成一

一 放

前句に對して風雨寒暖陰晴  
 向時のたさきとあるし

一 逆

前句の姿情を見まはし多くハ  
 前句の姿情を見まはし



知連おと軒  
倍書入る過り

同五軒

一 秋の月の山端に望かこと一

一 舟の遠波に浮沈かこと一

一 隣家にさいめことするかこと一

一 秋の風の万葉を吹かむかこと一

一 絵にかけける世の人の心を動かすがこと一

三句のわたり

今はたゝ劍のやうな浮世ぞ

封してわたす小判百両

三句わたり  
又封紙の物

子なかりと義理有中とない中と

封してわたすといふ所をゆるさす譲り

全書と、是存したる附方也

笹や小風のたぐめ字寮

栞梁は栞梁たけの工夫して

三味線箱の忽然と来る

かの石部金吉とかいへる普請奉行を綿にこ

なしたる栞梁の工夫いとよし 余情は舞子

の紅縮の夕染ともとるへし

山から里へ度的一声



○とめ  
振神と短くす  
婚儀前々後着る衣  
今はとめ神と字一様  
八口とあつてす  
キと

草庵に居餘り秋の十百員  
嚙や佛の塚ににこく  
草庵の十百員のうつり追善と定たり

養生のうす唐崎に役住居  
御意かるとめ、袖斗奉公

水性に火性の恋と合せか  
御意かるとめ、袖斗奉公

御意かるとめ、袖斗奉公  
何某の殿の仲人  
と給子  
側鞠の女と見定たる所いとよし

すゝひかへつて園の抛灯  
姐板とあふさす蕎麦の内証

拾ふた金を神や知るらん

姐板にならさすといふ所をとめて拾ふた  
金の心祝いと付たう  
一句のおかしみ又

去ほとに揚扨ハ萩のみと水酒  
角斗はとれとちやけり角錫

箱根の登に通し駕いたはりたるさま角錫の  
角斗とれたる五十餘のおとこなる一

夕染に希前重の出揃ふて  
悴気のけねのかゝる打水

角斗とれたるは  
角斗はとれとちやけり角錫  
角斗はとれとちやけり角錫  
角斗はとれとちやけり角錫



ト養に夏は一首と筆を又  
 尋常の折水有りて 情気の二字に三句目のい  
 とあつめきを夏は一首と狂言に和うけた  
 る道つかりさまも久るこ、ちす  
 茶碗にあたる情気三つ四つ  
 移香の屏風にわたる袖た、こ  
 龍温泉の花の螢ちりり  
 恋の移香を温泉に見直したる三句の一語を  
 り  
 汁を煮る間に過ぎ居る風

法書 上巻の十卷の二の目  
 明はるかにやれり

十九かう世は短気盛あう  
 あの瀟湘の末こハ泣せる  
 十九廿の短気を心中と見出して瀟湘のあし  
 うひいとよし 難波あたりのさまとこいは  
 んか  
 木まくうに一口恋のつまみ喰  
 勤のうちにとへたれこうう  
 降れくと祈る日祝の七ツ晴  
 ふれくと祈る人またぬ人ある勤の  
 たもて裏成一一 逃句の塩梅奇あう

(巻下五頁に  
 引附せり)



文初 紙巻の用法

卯の花草の片側所に思ふと奇す古君の隠水家  
 古い高尾の傍とすし  
 卯の花の片側所に黒松子  
 算木をさへて不動明王  
 一し  
 たうさまのあけ水さ 人情の教戒とある  
 キウスウロマの拳酒の二階を藁の下に籠い  
 羽二重の石かゝを思ふ菰の下  
 九ま四あ六はに雨は降あう  
 唐船に別て湊の家つくり

水祝 細水 少量の水

出陣の時を託宣の二字にあしう平生に  
 したう一轉あう  
 寝鳥の羽にも霜の有明  
 みたれ入四十七騎の玉たすき  
 算に古風を祝ふさ、水  
 四十七騎の玉たすきを水祝いと取あして  
 古風の二字に三句目をしつめとす



方と子と見おしたる世のさま

腋卷の上より供奉の素袍着て

管絃あふ月の音園

蜘蛛の団の蚊帳釣かゝる仲居

祇園石垣の風流打越のかたゝを和らげた

三句の一、静又細蜘蛛の団の五文字いかな

人をも繫く

馬市の立日ハ友にさへ返り

はつせは月の窟わがる

帯ハ先解ぬ念念のたはニ金

七ころの窟か、けえ月之のさまにあろ

右きたるに説の風情

人橋かけて仲居其外

目も既に千部陀羅尼の波かしら

流石はとけの鎌は拾いぬ

拾いぬの言葉に前句の往來の餘情を繫ぎて

一句のおかしこ

胎息と先へ来て居る忍冬酒

鴉をよせ又舞ちり

足もとに映日といへる地獄あり

前句のかり  
物動かし  
去るわたり  
地獄は  
あせこ



晦日の二子に獨尉の世わづらのわりあきす  
まをいひとりて余情深し

掃出した跡も春の吹返し

鏝別ものに荷か狂子之

数珠印の遺手若後家後帯

何某上人の帰馬或は入院の旅立と前句を見

おし、たの、其人の、迎付、

四阿屋の、も、唱子、の、つく

漸こ秋に居別染夫婦の

遠い吳見を文之折く

都かたより片回合に暫立思ひたの持ひ合こ  
見おして文の吳見いとゆかり

枕ふたつは茶屋と合点

影落る青田に風は有るあり

のほろぬえの富士に吞る、

田つうに風の吹おろすさま彼雪中の早苗の

古哥をふまへて富峯の景情摸し得たり

帆に持時は風の追く

飯櫃のい細さに炊か、

奉公戻りの却脱せる



詞巧  
夕夕  
夕夕

柴火焚家の二牧折に市所染うちかけ送りの  
おのこもそこに腰掛たるさま。余情に  
脊山原せりやまよりよくくししるるすすの時行風也

呼の側に先の夢ころろ

け方の相因を遠寺かう撞

こちの相因といひなくりたるは心せぬかる、

其夜の時分也

別當に一挺つゝ、ハ女中寫

八專晴のあやめみたる、

夢より誠の不二の丸裸

けうち越は其場其人こもりて殊にあつか  
きを五月晴の富士に轉まりり

午の筋の無心に三ノ筋筋汲汲て来て

引る、袖も右ひたりあり

鼓つりりうう志しめめるる踊のの山かつつら

右左より袖のくさま踊の夜の外にハあら

し

吹すに通了枕論の空袖

八景の入相穿て友からす

暮石崩せは斗の中よし



新所道頓堀の野傾も顔見知たる男連と前句  
 を定て志のあつかひ殊更の一時有り  
 出船へ使者の舟はるく  
 一筆に五言の巻取紙へす  
 師走の梅のかう白にちる  
 梅碓に禅院のさまをゆるすすしと時節の  
 走り也  
 取巻の中に妾と盃と  
 馴つたわへをたまし課日  
 札所かう札所の花の落

野傾  
 北濱  
 小橋の  
 痛と  
 呼る  
 小枕灯

快俊は皆女方の掛あり  
 小橋の痛と呼る小枕灯  
 胸くす取れた怯気預かる

湖水を見おろしたる山院をとりさま之  
 するハ隠居の趣ひ所成一  
 滯色も乾のぬ市の又月夜  
 砥のりわりの羞し印  
 木鉄に階子入るの角力取  
 砥寺の垣普清ると、附たり季のあいらひ  
 殊によし



十海丸  
あつとりの初  
中知ととあつとりの起情已

葉合の就上リに山上を足上とさま令昆  
 死すての外よハあらし  
 敷了伽羅と世をわたうくさ  
 柔めく水つ洩つあやめに朝の月  
 免忘をうさ使者のてさく  
 葉めく水つ洩つ言葉ささるしの、隠家と  
 眼を付たる起情こ  
 吹も謡も人の好  
 宿下りのうさし四角のまにこまり  
 巫女のうのあんと静さ

白湯煮ふ一すすりともあき野みさのあし  
 うん三句のてニハ又何うあらん  
 七、観音、は日和まるとよん  
 所茶の言あ、富士を一ツは、  
 下れであああい楯世校り  
 宗との富士を打晴さる清きと、足たさ所  
 こ  
 釣足ニあひの教も古市所  
 片管へ管片付て山のうさ  
 奇しめのと秋の令昆罷



世帯筋一の病下りよえこ巫女の通附ニ、  
ろ深し

先へ桑原の大小こゆく

同巻の加勢こ中店香も

市海こ風こ會式えくるい

同巻の二字をとめて女臺の宗音論と一轉

したる時節のあしうひこ

ろく向極こ途を別るい

桑原あど先へ螢の火を燈い

惟走ひり外につふやく

相次大磯と十四夜の同

桑原の曇夕顔の宿の外有へおらる

春王隣に栞杖の品

あちさ向星の黒髪雪の肌

思ふ教除こ白ひちるる

女の肌脱たころしろむきたむ一のまあひ

と足出しこ

鷗に餌さしの呵ら水てり

二ワ三ワ路中に建と登後架

ちあたの宮を置ておゆ

野中の葭葉茶屋も仇よ成たる飛神の行末

と去し



なまべ

高欄欄の下に裳袴の日極笠

向ふ鐘の銚合ふ

碌石石の足る手もとに細き燃し

遠寺の鐘の行合ふたす暗夜の船のいと芝束

あきすま碌石の二字字結結いひ取取左左梨

似似にあふあふのの梁梁日日和和己

歩越越の荷荷は笈笠一取込

狂狂不不影影馬馬の髪髪大串大串か

前句を詠役者と見出し、志の一時也

川越し、歩で  
陰陰  
問

カサレ  
鐘  
ケマキ  
ケマキ

前髪は小便の事  
伊勢屋大らおなり  
は老人がふりか

加羅  
鐘  
鐘  
鐘

垢垢に漆漆浴衣浴衣に袖袖も暮暮り

前髪前髪ながらながら纏纏りり可可る

伽伽羅羅はままくく柱柱すす新新地地のの鈍鈍盾盾

前髪前髪のの纏纏るるままのの大大工工わわららハハとと足足定定たたる

其其場場又又伽羅伽羅のの志志をを作作者者のの骨骨折折成成一一

扇扇置置小小めめ暑暑折折

旅旅こころろああひひかかるる、、新新大大豆豆

娘娘もも思思ふふ室室篋篋のの焚焚ややる

秋秋ののそそううおおささめめにに心心せせかかるる、、西西女女順順礼礼ののか

へへるるまま宿宿のの娘娘ののすすめめかか成成にに目目移移たたるる老老のの



よま見の風情す

夜く明て涼む壺底

瓜蒞子白込市の月の

にうみたさうに夜改換向

せん前栽物がいの市の人込にさし有へまさまこ

郊うつしの離れ道ゆる

あかしくと蝶にすかしく春車

通緯のほしい醫者の問答

乳はちわの子を庭にすかしたる病家のす

まとい出しく一轉の情探し

をのつかう月の涅槃の薄曇

駕につけは餘寒忘るゝ

何ヶ交れ男まさりの賑い書

権杖 門の乗物に走り添たる女のすまえるこゝ

地せくる

ほろく雨の上りこちける

唄も出ぬ青田の中の桂おくれ

離別つ戻しつあのたひり表

はるこの夫婦喧嘩り田植の時分はつれいと

あや



後ろと青葉とをの着そめ  
 笑ふ肉炎の赤、ろ駒を  
 行春とけ松攻を越ゆぬ  
 旅籠屋のついで、あやう、笑ひとかい、る中に  
 松攻の風情も有へし  
 柳は生うひてそこゝ百生  
 松の木に板板板のつゝる角力取  
 まよあいな聲を母のるに合  
 あくくやたすあつこの娘のそびた望と前句  
 をろこかしくふる己

旅に着衣象の下る有王  
 命さへあれとあやうにめくり合  
 若菜ニシキの笠笠よりせの盃  
 命さへあれとあやうにめくり合  
 一、轉、の心深し  
 さまくに世を侘衣着つ小立  
 智一挺に禿ふたうを  
 口書にさへ月と雪恋と周  
 け句日月の定座の珠にあつか、さけひこひ  
 なるを一挺の智に禿あふたうお合とる白白砂砂



戻りと見出しに物骨のさしあし

柴橋をこえて旭も他領<sup>命</sup>己

あふむ区に十念の声

脱捨<sup>二</sup>見れば重たい是境

徳右次郎なと發心の傍成へし

出<sup>レ</sup>名所の後家の世傍り

燈明を忘<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>持佛の二叔打

冥<sup>冥</sup>札あし<sup>の</sup>俄事あり

燈明を忘<sup>レ</sup>す<sup>レ</sup>二叔折俄は宿割の當りたる

嶋田金右あたるのふま己

けふは作者に抱<sup>遊</sup>ふ象礼

是<sup>は</sup>何との原風は物の掛餘り

世は逆さまの内義をこつ

無常の一轉<sup>己</sup> 席風に物の掛餘りえこら

取ちらしたるさまはこそ毒にあくれたる

男くらしの表成へし

酔<sup>は</sup>反かへる<sup>も</sup>卯卯の時

月の友双云の友草の友

おあろく<sup>と</sup>茶礼を祿<sup>じ</sup>

無常の一轉<sup>己</sup> 月の友草の友とかえへたる



不ゆるさす祭礼の供と見立しり

わすれと蓑の栗着て居

夜か明て漸く馬を呼了り

市公家ぬめりの揃筈鏡臺

時分の用こ 霽より去来亭へたる傳馬を

撃に夜明て呼さま滅に市公家の祿の外又有

へかりす

川風に鯛代の火影警あし

今のハ只の山伏なると

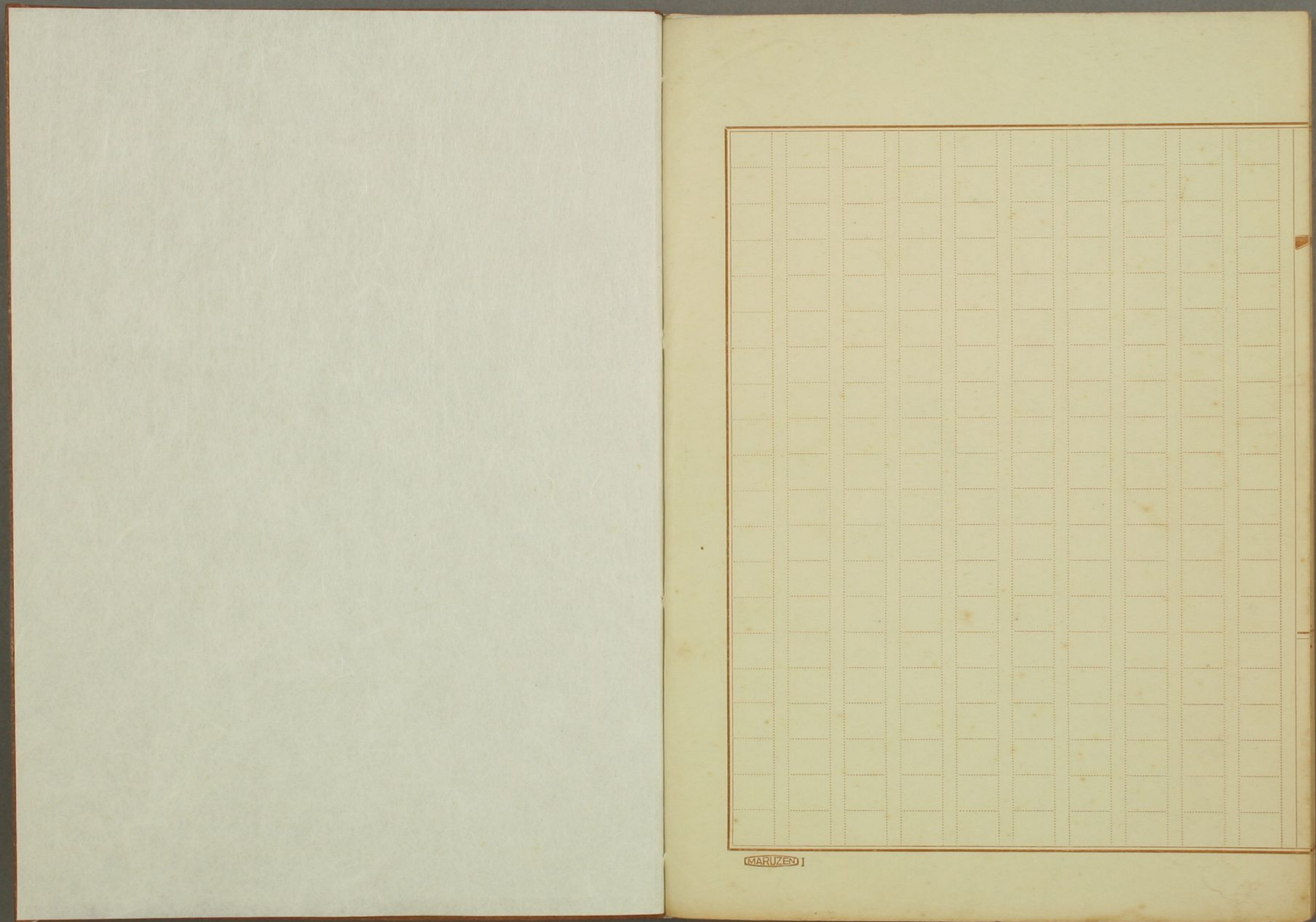
助言してほしい時分ハ足之せ

只の山伏なるとハ鯛代の夜の北の湯き

さま存了を盤上の平生に取てきたりよ

し





MARUZEN



